平成２８年度　教育事業
ふれあいワークキャンプ

不登校やひきこもりがちな若者が「はたらくこと」をテーマに２泊３日の共同（協働）生活に取り組みました。愛媛県南予地方の特産品である「みかん」に関する仕事を柱に、自然豊かな果樹園での農業体験を行ったり、選果場を含めた職場見学を行ったりして勤労に対する心情を高めることができました。また、自炊やクラフト体験、レクリエーションを通して参加者同士の関わりが深まり、他人を思いやる気持ちや自尊感情を高めることもできました。

１　事業実施までの経緯

近年、ニートやひきこもり、不登校といった青少年をめぐるさまざまな課題が社会問題化しており、その原因として直接体験の不足、生活習慣の乱れ、希薄な対人関係などが考えられる。そこで、この問題に対応する国の政策として自然体験の指導者を養成する取組や、青少年の様々な課題に対応した体験活動を推進していくという「青少年体験活動総合プラン」が平成２０年、文部科学省より打ち出された。青少年体験活動総合プランには、自然体験指導者養成事業と子ども・若者育成支援のための体験活動推進事業の二つがあり、今回のワークキャンプは後者の事業になる。発達段階に応じた様々な体験活動を実施しながら、ニート、ひきこもり、不登校などを対象に立ち直りを支援したり、社会性や就労意欲の向上を図ったりするというねらいがある。

本事業の委託を受けた国立青少年教育振興機構では、青少年の課題に対応した体験活動推進事業を全国２８カ所の施設で継続して展開してきた。国立大洲青少年交流の家では、１９年目を迎えた適応指導教室「おおずふれあいスクール」を併設しており、そこで長年に渡り積み重ねてきた自然体験や生活体験、就労体験等を積ませることで自主性や社会性がはぐくまれ、心身共に健康な生活を送るためのきっかけづくりができるのではないかという仮説のもと、県内の適応指導教室に参加を呼びかけて「ふれあいワークキャンプ」を企画した。

２　ね　ら　い

柑橘の摘み取り作業等を体験することで、働くことの意義を体感する。また、参加者や農家、地域の方々との交流や共同（協働）生活を通して、たくましい生き方や心豊かな生き方を感じ、自立への力を育てる。

３　主　　催　独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立大洲青少年交流の家

４　共　　催　大洲市教育委員会

５　後　　援　愛媛県教育委員会・愛媛新聞社

６　協　　力　大洲市出海公民館

７　期　　日　平成２８年１１月１５日（火）～１１月１７日（木）

８　場　　所　大洲市長浜町出海「永沼農園」　　大洲市出海公民館
株式会社あわしま堂　　国立大洲青少年交流の家

９　対　　象　不登校及びひきこもりがちな中学生・高校生・青少年
※適応指導教室のスタッフやスクールカウンセラー等の連携・協力が可能な方

１０　参加人数　１８名　（募集人数１０名程度）

１１　講　　師　永沼 寛 氏　・　河井昭昌氏

１２　日　　程

時 間	１５日（火）	１６日（水）	１７日（木）
６：３０		起床・朝食準備	起 床
７：００		朝のつどい・食事	朝のつどい・食事
８：００		片付け・準備・移動	退所準備
９：００	受 付	デコポン袋かけ体験 （永沼農園） 講師：永沼氏・河井氏	職 場 体 験 あ わ し ま 堂
１０：００	はじまりのつどい		
１１：００	移 動		
１２：００	昼 食	昼 食	終わりのつどい・解散
１３：００	はじめのあいさつ みかん選果体験 （出海公民館） 講師：永沼 寛 氏 河井昭昌 氏	みかん摘み体験 （永沼農園） 講師：永沼 寛 氏 河井昭昌 氏	
１４：００			
１５：００			
１６：００	移 動	移 動	
１７：００	夕べのつどい	夕べのつどい	
１８：００	夕食・片付け	夕 食	
１９：００	ふれあいタイム カプラブロック体験等	みかんツリーオーナメント作り	
２０：００	ふりかえり・自由時間	ふりかえり	
２１：００	入浴・就寝準備	入浴・就寝準備	
２２：００	就 寝	就 寝	

※　１５日（火）の夕食については自炊に取り組んだ。

１３　活動内容

活動の前日からあいにくの雨模様であったが、協力してくださる農家の方々や企業の担当者の方々と事前に打ち合わせを行い、雨天プログラムも加えながら当初のねらいを達成すべくワークキャンプを実施した。

〈第１日【１１月１５日（火）】〉　国立大洲青少年交流の家・出海公民館

「はじまりのつどい」　国立大洲青少年交流の家職員

（１０：００～１１：００）

開会式では、交流の家所長からのあいさつ、スタッフ紹介を行い、参加者の緊張をほぐすためのアイスブレイクを行った。その後、ワークキャンプの趣旨や３日間の日程についてスライドを用いて説明した。その後個々の目標設定を行い、３日間をそれぞれにどのような過ごし方をしていくか、確認した。

「みかん選果体験・糖度測定実習」　大洲市出海公民館

永沼　寛氏・河井昭昌氏（１３：００～１６：００）

午後は出海公民館に移動し、昼食をとった。昼食後、お世話になる講師の永沼氏、河井氏との対面式を行った。その後、収穫されコンテナに荒積みされたみかんを前に、講師から産地の説明やみかんについての説明（種類やサイズ、糖度、ランク等）を受けた。最初の実習は、みかんの大きさごとに仕分ける「選果」の作業を行った。参加者たちは３つのグループに分かれ、それぞれが専用のゲージを用いて２Ｌから２Ｓのサイズに選果した。

次に糖度測定の実習を行った。各自が甘いと思う個体を選び、順番に糖度測定を行った。参加者は甘くて程よい酸味の個体を見極める秘訣などを知り、より糖度の高い個体を探すことに挑戦した。

最後に、永沼氏、河井氏と自由懇談を行った。永沼氏からは「人生は長いが、一歩でも半歩でも前進しようとする気持ちを大切にすること」「自分ががんばる気持ちをもって取り組んでいると、必ず助けてくれる人がいる」「努力を重ねれば小さな変化が訪れる。その変化の積み重ねが、振り返れば大きな変化につながっている」といったお話をしていただいた。また河井氏からは「我慢して耐えてがんばって努力を重ねれば必ず芽が出る」「とにかく自分を大切にして日々を過ごしてほしい」という力強いメッセージが語られた。

「夕食づくり」　国立大洲青少年交流の家
（１７：００～１９：００）

交流の家での共同生活では、参加者は２班に分かれ、各自が役割を分担して食事作りに取り組んだ。参加者はそれぞれ「カレー作り班」「サラダ作り班」に分かれ、手際よく夕食の準備を行った。

「ふれあいタイム　～カプラブロック～」
（１９：００～２０：００）

夕食後は宿泊の参加者全員でカプラブロックを使ったレクリエーションに取り組んだ。カプラの積み木を個人で競った後、二人組で競争をした。二人組でのスタート時には、どのような形で組み上げるかを相談する時間を設けた。個で形づくった際の経験を活かし、さらに相手の考えを尊重しながら作戦を立てる時間は、協働する姿勢を体現できる良い機会となった。最後は全員で「トムのナイヤガラ」を制作し、カプラの壁がきれいに崩れていく様を楽しむことができた。

「ふりかえり」　国立大洲青少年交流の家職員
（２０：００～２１：００）

全員で初日のふりかえりを行った。選果や糖度検査の体験活動の内容についてふりかえる者がいる中、大半の参加者が永沼氏、河井氏が語られた言葉を感想に挙げ、仕事に向き合う真摯な態度や、信念を貫く生き方、年をとってふりかえったときに初めて気づく感謝の思い等、心に残った言葉をお互いに発表し合い、思いを共有した。

〈第２日【１１月１６日（水）】〉国立大洲青少年交流の家・永沼農園

「朝の活動」　（６：３０～８：００）

６時３０分に起床し、身支度を調え、７時からの朝のつどいに備えた。朝のつどいでは、それぞれが旗係、体操係、あいさつ係に別れ、各自の役目を果たすことができた。

準備を整え、バスで一路長浜町出海地区の永沼農園に向かった。この日は、内子適応指導教室から小学生４名、中学生１名、引率２名の方々も合流しての活動となった。

「デコポンの袋がけ体験」　（９：００～１０：００）

農園に到着すると、最初に「デコポンの袋掛け」作業を行った。サンテといわれる袋状の布を果実一つ一つに丁寧にかぶせていった。一人あたり２個ずつ、自らの名前を記

した袋をかけさせてもらった。これらは収穫時に、農家の方々からプレゼントしてもらえるとのことで、参加者から歓声が上がった。その後背の高い中学生が高い場所にある果実に、小学生は足下付近にある果実にと作業場所等を分担し、迅速に作業を続けた。お互いが声を掛け合い、道具の貸し借りをしながら作業を行うことで、予定よりも早く袋がけの作業を終えることができた。

「みかん摘み体験」　（１３：００～１６：３０）

午後からは、温州みかんの摘み取り作業を行った。はさみや収穫袋の使い方を教わると、子どもたちは一斉にみかん摘みの作業を始めた。はじめはおぼつかない手つきでの収穫作業であったが、永沼氏らが適時収穫の手ほどきを示すと、子どもたちの手つきも次第に手際のよいものとなっていった。大小様々な大きさのみかんをていねいに摘み取っていくと、瞬く間にコンテナいっぱいのみかんが収穫されていった。作業の合間に講師の永沼、河井両氏からおいしいみかんの見分け方等を教わり、その都度試食もさせていただいた。時間を忘れるほど集中して作業がすすんでいった。途中、全員で休憩時間を設けた際には子どもたちが即興で歌やダンスを披露し、お世話をしてくださった農家の方々を喜ばせることができた。後半も時間いっぱいまで集中して作業に取り組むことができた。瀬戸内海を見下ろす高台にある園地から眺める景色は格別であり、作業をする子どもたちの表情はとても充実していた。

「みかんオーナメントづくり」

（１８：００～１９：３０）

永沼農園でいただいたみかんを用いて、みかんツリーのオーナメントづくりにも挑戦した。県の特産品であるみかんを用いたクリスマスツリーオーナメントについて簡単に紹介をし、一人あたり１～２個のオーナメントを製作した。

「ふりかえり」　国立大洲青少年交流の家（１９：３０～２０：００）

出海地区の農園で過ごした一日をふりかえり、一人一人ができたこと、感じたことを発表していった。仕事に関する感想を述べる者、人と人との関わりを述べる者等さまざまな感想を聞くことができた。今日の一日は、参加者にとっても貴重な体験にもなったが、たくさんの小中学生を受け入れた農家の方々にも有意義な時間を過ごしていただけたことを伝えた。参加者一人一人が主体的に人と関わることで、周囲の人々に笑顔や喜びを提供することにつながるのかもしれないと伝え、ふりかえりを締めくくった。

〈第３日【１１月１７日（木）】〉国立大洲青少年交流の家・あわしま堂

「朝の活動」　（６：３０～８：００）

最終日の朝、つどいも４回目となり、国旗の掲揚もスムーズに行えた。朝食、清掃等朝の活動を終えたあとは各自の荷物をまとめ、最終の職場へ移動準備を整えた。

この日はおおずふれあいスクールの通所生４名も加わり、中学生１０名、青年２名の１２名が参加した。

「あわしま堂職場体験」　（９：００～１１：００）

株式会社あわしま堂の本社工場で和菓子の梱包作業を体験した。実際に工場から出荷される製品を扱うということもあり、作業前には工場の責任者から「服装等衛生面に気を配ること」「作業は丁寧に行うこと」「一生懸命仕事に従事すること」「商品とともに笑顔を届けるつもりで働くこと」といった注意がなされた。

作業用の服装に着替えた参加者は、何段階にも重ねられた衛生チェックを終えたあと、正月用に用意された和菓子の梱包作業を行った。２班に分かれ、個別の包装容器を並べる者、下敷きとなるカップを並べる者、和菓子をのせて封をする者がそれぞれ作業を分担し、慎重かつ迅速に作業を進めていった。１時間程度の作業であったが、みかん農園とは異なる作業に、参加者は満足感を得た表情であった。帰り際には副工場長から「１時間の労働対価として、本来なら給料が支払われるのですが、そういうわけにもいかないので･･･」と述べられたあと、参加者一人一人にお菓子の詰め合わせが配られた。参加者は「労働に対する対価」という概念を具体的に示していただいたことで、より実感のわく体験となった様子であった。

「終わりのつどい」　（１２：００～１３：００）

閉会式では参加者全員が一言ずつ感想を発表し、３日間のふりかえりとした。参加者からは、「農業と工場での作業を体験したが、どちらも大変だったけれど充実感があった。」「いろいろな人にお世話になった３日間だった。感謝したい。」との感想が述べられた。最後に主担当者が３日間の講評を行い、全ての日程を終了した。

１４　参加者の声

参加者の事後アンケート結果を以下に示す。

＊満足：71.4%　**＊やや満足：28.6%**　**＊やや不満：0.0%**　**＊不満：0.0%**

○　３日間で、最初は話せなかった人ともかなり話せるようになり、とてもうれしかったです。

○　３日間のキャンプで一番心に残ったことは、まわりにいる方々の温かみです。みかんの選果、デコポンの袋がけでは、地域の方々の心遣い、温かい言葉の数々にとても感動しました。笑顔になれるような体験でした。

○　普段なら疲れて楽しくないと思うことも、全然そんなことはなくて、「協力するっていいな」と思ったし、働いてみることもワークキャンプでは嫌ではありませんでした。

○　（体操係として）朝のラジオ体操はすごく緊張したけれど、気持ちよくできたのでよかったです。

１５　成果と課題

３日間のワークキャンプでは、みかん摘み、工場での職場体験、共同生活など、普段の生活では体験できないものが多く、毎日の生活が単調になりやすい不登校児童生徒にとっては、自分自身を見つめ直すよい機会となった。今後も、地域の素材や交流の家のプログラム･施設を活かしたワークキャンプを開催していきたい。本事業の成果と課題を以下に示す。

【成果１】　基本的生活習慣の改善

３日間の事業期間中は規則正しい時間帯で生活ができており、「早寝早起き朝ごはん」運動の推進を図ることができた。参加者の中には普段、生活リズムが不規則になりがちな子どもが多くいたが、事業期間中は就寝時間、起床時間も無理なく守れて、食事もしっかり摂ることができた。１日目の夜には自炊体験としてカレー作りを行ったが、参加者は普段、家事を手伝うことのあまりない生徒が多く、家族への感謝を思いながらの体験となった。参加者はそれぞれに、基本的生活習慣の改善について考えるきっかけがつかめたものと思われる。

【成果２】　地域の方々、他教室の通所生との交流

３日間の期間中、みかん農家の方々、工場の担当者の方等多くの大人と接する機会があった。「働く」という体験活動を媒体にすることで、普段は口数の少ない参加者たちの口も自然と開き、明るい表情で活動に取り組むことができた。そして、その活動に対して適切なアドバイスを受けたり褒められたりといった体験が、参加者の自信につながっていった。

また、今回はおおずふれあいスクール、今治コスモスの家、内子適応指導教室の３教室から参加者が集った。閉鎖的な人間関係になりつつある適応指導教室の通所生にとって、同年代の子供たち同士のふれあいは、協働作業の刺激を喚起する一因ともなった。

【成果３】　ＩＫＲ（生きる力）評定用紙（簡易版）　事前事後の比較

本事業での体験が、参加者にどのような変化をもたらせたのかを調査するために、「ＩＫＲ（生きる力）評定用紙（簡易版）」を実施した。右のとおり、すべての項目において事業後に数値の向上が見られた。参加者は事業をとおして内面的な成長を見せ、生きる力の伸長を図るきっかけをもてたものと考える。

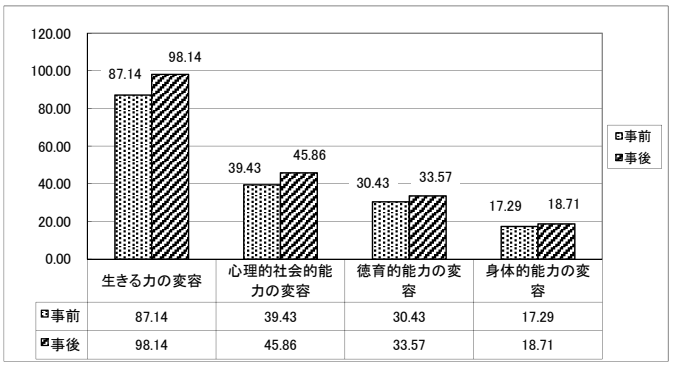

図１　ＩＫＲ（生きる力）評定用紙（簡易版）

【課題１】　雨天時対応プログラムの検討

今回は事業初日が雨天であり、予定を変更して公民館内での選果作業を中心とした活動となった。メイン講師との対面が室内の落ち着いた雰囲気の中で行えたことはよかったが、その後の活動にメリハリがつけにくかった。雨天時の対応について、よりよいプログラムとなるよう検討しておく必要がある。

【課題２】　活動場所の拡大を検討

３日間の活動が勤労体験中心の活動であったが、さらに勤労意欲を高めるための手立てを模索したい。例えば農家や企業での業績が向上したような機会があれば、そのきっかけとなった秘策やそこに至るまでの経緯等を何らかの形で伝えていただければ、子供たちの勤労意識の高まりを喚起することができるのではないかと考える。関係団体や連携協力先と事前に協議し、プログラムの工夫、改善に努めたい。

（担当：企画指導専門職　森分 洋樹）